

萬治御点

上

皇  
911.157  
M.a  
3-10

60620



万治二年九月一日點取和歌

後水尾院勅点

父郭公

直

月まらて<sup>四</sup>志<sup>友に</sup>か<sup>五</sup>郭公<sup>五</sup>ま<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>る<sup>三</sup>次<sup>八</sup>ら<sup>九</sup>る<sup>ニ</sup>

次貝



ふらひき<sup>二</sup>ら<sup>三</sup>枕<sup>こい</sup>ち<sup>い</sup>り<sup>く</sup>き<sup>ぬ</sup>く<sup>る</sup>の<sup>い</sup>ら<sup>う</sup>

御制衣後西院



たはつなをれ<sup>つ</sup>何<sup>く</sup>ぬ<sup>ち</sup>と<sup>ら</sup>を<sup>タ</sup>ミ<sup>ら</sup>ら<sup>れ</sup>余<sup>は</sup>の<sup>声</sup>

香向



とあるりくれゆくをこれ本と云ひ其の名所と月と初して  
後成は声は松の奇おを不うらぬ文字多ゆ

通

夕月夜はのちさそむらやうらりをのれと出山郭公

少ありーきりやうき

御製 御点 日野新大納言 沢貝慶卿 源中納言 通茂卿

伯二位 雅喬卿 雅直朝臣

万治二年九月二日 同三首和歌

五月雨晴

別名を記新のちかゆつてく月とやくしては海は目はるは

喬

限りあれは風とももて五月雨のちか日較まを海をた

通

五月雨のちか海とく晴る風の月とたす風の浮雲

新大納言 日野

を晴て四つかもすなり五月雨さえさし山の滝の白糸

直

きふいしくつぎのちとがうりあれちと流と晴る月夜れ  
遇不逢也  
新大納言 日記

直

おちちうへつとむごん物とといさやまのちの國はあはれ  
なりさやなれ—その夜の言の成ふとむり—治りのまゝ  
なせと、

あいら—いあううつととはかりよほもつ—ち中た月

通

飛とすちまうりしきれちい—又と何んぬ中た  
喬

通

松風破夢

うれくちうい物と小夜又うち甲又何ん  
夏の夜の手控ちうち招ちつたをくち友をいと短ち

ちち夏れ名跡のこさすうれ—こちうちもいへは  
書風

ふりあはれあはれをくつみりあの花もあはれ  
あはれ

秋のあはれ秋こもいもあはれあはれあはれあはれ  
あはれ

秋風を雲又まかりて何ともあはれあはれあはれあはれ

御製 一首 日守新太御言 二首 伯三位雅直朝臣

通茂 一首

同二年五月十九日 二首和歌同

夏月易明

霜あると日紅まつあはれ秋をれらえいこあまのあはれ  
の月

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれ

直

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれ

新方納言日記

明らぬれどこの法の法りのことと友達の夢やう日記

物多

資

大井川うまひのうらむ教えととくられ山乃けりもほ

大井川くさむうふ福乃まくよとくれさらたつ毎火の記

香

引くくはうめひおそれとんしててせよれら<sup>三</sup>毎火の記

直

物何なるこの教くくすもまぬあつく毎火の記

弘

記

うらむあひくくことくを上げぬみ程教つておつ毎火

寄書

名<sup>我んあそまたのせん</sup>あひかかくそごふ人なれに<sup>ね</sup>たゆふ<sup>ちりせハ</sup>いさほきの<sup>ちりせハ</sup>北極

直

さくらさへくをりれる海を中くとちつともほらに

資

あまをこれうらなむり何れ新まらうこゝろいふやあるも  
いとこし

たとい何りこ中くあるやうちこきてこゝろあまれなる国の控

伯三位

かいつつ控はるるや新いふつて何りやなりやと

御制衣 二音 日登大納言 日登新大納言 一音

雅直朝臣 雅喬 二音

同二年五月廿二日 二首點取日

水雞何方

新大納言 日飛

きつ門のちしてせりく方をれらうらこちすあくあ  
雞の

山虎のたり門にてやこそめんをこかすれん中とくあ雞  
やまねこしひの

喬

ねこまらやとと安えに控のまれつれこちしてあく水雞

弘



芳きつゝ水影やいつおまここの月のまれらそよかき

逐日増え

喬

測こなるはよもえよ目よそへておひまよこの池乃お返

新古納言

めらぬおら志のや川れも物とよまよこの境又うけにじ

あすいさるいつよせうそー洞川のやううはるおれおひ

弘

おいとやたー系あこのまに鏡るうくおの何うすおり

山内家人稀

山里れおあふおあきう友とらぬのれし人こそをれおれ

弘

おこを死せ地にもいんふ人のまれなき山や信うかきは

喬

ふふうこたれこと娘何となうして喜あ又おれお言の通ぬ

新ちりき谷の松本とあさりまて入山いとふくちとそるん傳

御製 日登新方納之 二首 伯三位 弘次具

同五月廿八日 二首 点取 同

夏木 日登新方納之

夏木 日登新方納之 二首 伯三位 弘次具

源中納之

新ちりき谷の松本とあさりまて入山いとふくちとそるん傳

直

新ちりき谷の松本とあさりまて入山いとふくちとそるん傳

新ちりき谷の松本とあさりまて入山いとふくちとそるん傳

弘

新ちりき谷の松本とあさりまて入山いとふくちとそるん傳

新ちりき谷の松本とあさりまて入山いとふくちとそるん傳

夏衣

大納之

日登

夕風

花もつらん神もつらん友もつらん衣もつらん

喬

友衣もつらん神もつらん友もつらん衣もつらん

友衣もつらん神もつらん友もつらん衣もつらん

雅直

向うに多と口くろく裾袴の父衣もつらん友もつらん

次貝

夏衣もつらん月神も神のうちれ玉のこまにらるる

通

向うに日神もつらん神もつらん友もつらん衣もつらん

夏衣

えんそとあれ家こまにらるる友もつらん衣もつらん

通

恨あれや向うに月もつらん友もつらん衣もつらん

次貝

何れと成りてぬるの床に夢さすこといはずきれ

弘

まん

いつて口の中をいんえの衣に何れの名のじして何れ

志

いづも

うやうやしく梅よこもよふ友の衣に何れ福さきひ何れ

喬

空ハ

あるはつと月多れむれいそ友の衣乃れとあそいひ

御製 一首 日登大納言 一首 日登新大納言

まん

中院中納言 一首 伯三位 一首

雅直 一首

同六月六日

清尚左衛門取又十首 和歌

仙洞勅点

早春

新附日也あまむら山のもやそあまの市こも川あらん

竹亭

花大納言

口の友と谷をゆくられ折れあふ山はるを 雪は声

江上左衛門

流の音もあはむ入江の朝なるよにもかけゆる玉は徳山

雪中梅

あらしのふもとの花よとれゆくあらしのふもとの梅

春柳

一葉あらしのふもとの梅よとれゆくあらしのふもとの柳

去夕月

あひわれや清めていもその月りすむ夕の雲れをたてし

及序

朝あらしのふもとの梅よとれゆくあらしのふもとの序

初花

通

暁をむら木末にえれはけしめ花はしらけ暮は白雪

化埋跡

あ

風の跡はしらけゆくゆらぎしあらしの梅はあらしのけしめ

雲雀

喬

を流し日あらしの序の雲けしめあらしの梅はあらしのけしめ

新樹

弘

あけつゆく梢はしらけ花はしらけ紅雲とけしめあらしの梅

萩も近枕

親岑

は初ーさかゝるくちとふまつて

枕にまねくたきのうハ風

夕虫

たまをかゝるそ歌くまことに海つ虫は  
あつてもさこーさ庭乃あさちふ

松契齋

京都西氏御子

うつー極るんるるの松れを急あきく  
あはふいあをふ世もつてし

時鳥

志

あられくみおわくかこらへはささいどの五月はうめうね

盧橘

伯三位

梅ちりくそそり うめがさくら 笑むむり うめ 友い新張はほほ立

夏草

夏ぬくあけらるるあに志あをそそり あけ 夏のたもか

夏月涼

中院中納言

あしはな いとそそり あしはな のりきのあの子 あしはな 加へてさすわととの月此

野父を

日光

おれし あしはな 習ふふるといふ あしはな くらきなく あしはな 詠はてしむふ夕

あ遠量

通

あつさ日とられゆく あつさ 志ああ あつさ きて あつさ 志 あつさ 志

七夕

中院中納言

かああ あつさ 夏のつらさの あつさ 一とせとま あつさ ちと あつさ なられや あつさ せ川

圃萩

喬

なれと あつさ いうち あつさ 思ふ あつさ 母との あつさ 志 あつさ 志 あつさ 志 あつさ 志

上風

唐草

弘

秋風もさびしくつくとれ重なる家い尾を小袖せを

秋田

新方納言

うちれおくいな一海小田小重阿るる家し辛あ秋

雨夜堂

弘

やんをん

夜のみとやむむら福あつとて又神あつて夜中の

月夜秋

日光

あつてはむ月と秋との月あまの日雲あ死せしをぬき

滝月

雅直

あつてはむ月と秋との月あまの日雲あ死せしをぬき

持衣

新方納言

ふけゆけはものよりされぬ唐衣うつち多う子取の袖は

菊久靉

新方納言

おれははるも何れもたれもたれもたれもたれもたれも

黄葉

喬

うすくこくまくと木たれもたれもたれもたれもたれも



初冬

照宣院宮

冬来ぬてんせしうせと家にお風はゆしよと新ひて

時雨

音平

吹さくふりしとそく山は陽れ一むく雪れおられてそゆく

寒き子

日光

あちこれ枯野みあうさこれ雪のおおみくもきささ

水神結

志

汀うてつ山おほうじささいさう池のともくみあうさこれ

冬月

ふり、秋もつるりしさをおおの上おおるりゆさみお月記

積雪

立平

ぬるまに山とほくりて松竹のきちめとえんはに積る白雪

鷹狩

大納言 日記

あて秋さきまの立の影へのうつる衣さあふかりこいおとしくは

密月意

大納言 日記

こへり影をれあまどうぬるむくの月とにやう神の海舟

雲、  
方納言日

いづれに ついに なるか さき なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか

山、  
いづれに いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか

河、  
いづれに いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか

門、  
いづれに いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか

座、  
伯三位

人心の吹く風の吹くやりの席のわたりなるか

あ、  
中院中細

いづれに いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか

鏡、  
弘 神

いづれに いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか

時夜覚、  
照る階

いづれに いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか いづれに なるか

山家

友と況く何としか多くけ本の戸ハるもほせよかへりわい  
す

浦解

雅章卿

海士一たのせれり二や三身四と五う六る七あ八こ九に十あ十一ら十二り十三て十四お十五も十六定十七ぬ十八世十九世二十

旅行

次貝

後人

これと又こやこなりせハこそかり又なうめてるぬうこいしそ

連懐

中院中納言

如

初哥三此四浦五又六ら七あ八ふ九立十う十一う十二う十三う十四う十五う十六う十七う十八う十九う二十う二十一う二十二う二十三う二十四う二十五う二十六う二十七う二十八う二十九う三十う三十一う三十二う三十三う三十四う三十五う三十六う三十七う三十八う三十九う四十う四十一う四十二う四十三う四十四う四十五う四十六う四十七う四十八う四十九う五十う五十一う五十二う五十三う五十四う五十五う五十六う五十七う五十八う五十九う六十う六十一う六十二う六十三う六十四う六十五う六十六う六十七う六十八う六十九う七十う七十一う七十二う七十三う七十四う七十五う七十六う七十七う七十八う七十九う八十う八十一う八十二う八十三う八十四う八十五う八十六う八十七う八十八う八十九う九十う九十一う九十二う九十三う九十四う九十五う九十六う九十七う九十八う九十九う百う百一う百二う百三う百四う百五う百六う百七う百八う百九う百十う百十一う百十二う百十三う百十四う百十五う百十六う百十七う百十八う百十九う百二十う百二十一う百二十二う百二十三う百二十四う百二十五う百二十六う百二十七う百二十八う百二十九う百三十う百三十一う百三十二う百三十三う百三十四う百三十五う百三十六う百三十七う百三十八う百三十九う百四十う百四十一う百四十二う百四十三う百四十四う百四十五う百四十六う百四十七う百四十八う百四十九う百五十う百五十一う百五十二う百五十三う百五十四う百五十五う百五十六う百五十七う百五十八う百五十九う百六十う百六十一う百六十二う百六十三う百六十四う百六十五う百六十六う百六十七う百六十八う百六十九う百七十う百七十一う百七十二う百七十三う百七十四う百七十五う百七十六う百七十七う百七十八う百七十九う百八十う百八十一う百八十二う百八十三う百八十四う百八十五う百八十六う百八十七う百八十八う百八十九う百九十う百九十一う百九十二う百九十三う百九十四う百九十五う百九十六う百九十七う百九十八う百九十九う百

古屋屋

寄松祝

口り一若二れ三ち四こ五せ六の七ほ八よ九ち十う十一せ十二ぬ十三ら十四ま十五の十六様十七や十八こ十九の二十

御製四衣五日六野七新八大九納十言十一花十二々十三井十四大十五納十六言十七浦十八松十九

伯一三二位三日四野五大六納七言八照九多十院十一文十二

中院中納言四雅直二院一雅喬一

同六月十三日 又々初哥占点取 同

霞隔遠樹

雅章

掉姫此遠山うつうき々へてあむ尾上の松をこかつら

通茂

巻分の様々やいふよとことれく金所の指もくもろ

あま

次貝変

まろけ二えの浦の望を 程くそくやち松のむを

弘治具

立そあそ藤やいくへ松もけハき山松のまのこりめ

照亨院文

金所めさへあまも何れ立にきてまはり清に清

金所

雅直

下まへく藤はれもまはりよらも指そりこことれ

雅喬

うれとれく藤松山の松松系ちうさそ藤をさ改御て

御製 後西院

さのあもちよむうひー山雲の指あいつく藤松をく

雅喬

雲をさそあもくく藤はれもまはりよらも指そりこことれ

後西院

道晃

村あるれゆく川のせきふるまことのれありゆくは

雅直

保こきん村あるまきけついふこ名こなる行ひん

清製

にの<sup>二</sup>か<sup>一</sup>みち<sup>三</sup>に<sup>四</sup>つれ<sup>五</sup>ち<sup>六</sup>り<sup>七</sup>す<sup>八</sup>一<sup>九</sup>ぬ<sup>十</sup>秋<sup>十一</sup>熟<sup>十二</sup>時<sup>十三</sup>秋<sup>十四</sup>時<sup>十五</sup>何<sup>十六</sup>き<sup>十七</sup>む

弘資

ゆらわどい金<sup>一</sup>は<sup>二</sup>よ<sup>三</sup>も<sup>四</sup>さ<sup>五</sup>く<sup>六</sup>ぬ<sup>七</sup>ぬ<sup>八</sup>ま<sup>九</sup>の<sup>十</sup>時<sup>十一</sup>く<sup>十二</sup>や<sup>十三</sup>し<sup>十四</sup>山<sup>十五</sup>休<sup>十六</sup>多

資夏

ひらぬのまうし雲<sup>一</sup>あり<sup>二</sup>れ<sup>三</sup>お<sup>四</sup>こ<sup>五</sup>な<sup>六</sup>月<sup>七</sup>と<sup>八</sup>こ<sup>九</sup>そ<sup>十</sup>ひ<sup>十一</sup>く<sup>十二</sup>声<sup>十三</sup>ら<sup>十四</sup>く<sup>十五</sup>こ

雅章

ぬすく海<sup>一</sup>山<sup>二</sup>は<sup>三</sup>と<sup>四</sup>き<sup>五</sup>ん<sup>六</sup>う<sup>七</sup>た<sup>八</sup>なり<sup>九</sup>し<sup>十</sup>る<sup>十一</sup>ま<sup>十二</sup>と<sup>十三</sup>雲<sup>十四</sup>五<sup>十五</sup>清<sup>十六</sup>く<sup>十七</sup>こ

通茂

ひらぬまうこれ<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>る<sup>三</sup>所<sup>四</sup>宿<sup>五</sup>ま<sup>六</sup>く<sup>七</sup>時<sup>八</sup>る<sup>九</sup>雲<sup>十</sup>流<sup>十一</sup>れ<sup>十二</sup>熟<sup>十三</sup>ま<sup>十四</sup>る<sup>十五</sup>

海邊秋月

通茂

白妙の花<sup>一</sup>り<sup>二</sup>こ<sup>三</sup>を<sup>四</sup>へ<sup>五</sup>く<sup>六</sup>り<sup>七</sup>つ<sup>八</sup>海<sup>九</sup>の<sup>十</sup>う<sup>十一</sup>こ<sup>十二</sup>れ<sup>十三</sup>は<sup>十四</sup>ま<sup>十五</sup>す<sup>十六</sup>り<sup>十七</sup>月<sup>十八</sup>

御製

流すらう一板かりて流えうささる兒子星月は月とあらん

資貞

月しんげいのけにあまはくも月にあまやとのつうう桐をたくぬあまの浦人

照久院

次四の浦や木のうもあそ息月ほして二又三あつう三は神の秋風を

雅章

三才三の何二もれ神二や一う一てとあほ四くむ五はるき夜月三にほる

弘次

玉津島雲霧ともくもくあやあ浪月あ事津月とみかく浦風

雅直

任勢のあまれとのうあつこと目を見津流の月と捨ひく

雅喬

頂麻のあまらてぬ月とあまふのうすむくあつうてあはん

依寧侍人

御製

せりりえいさちさ庭のあまると物まわ流流らん人をまら

通茂

こへりれ心の根<sup>い</sup>さきも<sup>い</sup>な<sup>い</sup>秋うつむれ<sup>あさちうたの</sup>雲<sup>い</sup>は<sup>い</sup>さき<sup>い</sup>り<sup>い</sup>

弘安

ちさう程ごとく<sup>い</sup>く<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>と<sup>い</sup>り<sup>い</sup>み<sup>い</sup>清<sup>い</sup>は<sup>い</sup>う<sup>い</sup>く<sup>い</sup>も<sup>い</sup>程<sup>い</sup>う<sup>い</sup>白<sup>い</sup>雲

雅喬

三<sup>い</sup>り<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>え<sup>い</sup>せ<sup>い</sup>お<sup>い</sup>え<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>や<sup>い</sup>と<sup>い</sup>か<sup>い</sup>り<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>も<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>た<sup>い</sup>の<sup>い</sup>と<sup>い</sup>節<sup>い</sup>の<sup>い</sup>細<sup>い</sup>

乃晃

ぬ<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>け<sup>い</sup>く<sup>い</sup>や<sup>い</sup>り<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>者<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>人<sup>い</sup>に<sup>い</sup>何<sup>い</sup>じ<sup>い</sup>物<sup>い</sup>く<sup>い</sup>う<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>か<sup>い</sup>や<sup>い</sup>い<sup>い</sup>と<sup>い</sup>

雅忠

こ<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>人<sup>い</sup>同<sup>い</sup>か<sup>い</sup>お<sup>い</sup>も<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>や<sup>い</sup>お<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>何<sup>い</sup>く<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>危<sup>い</sup>

雅章

大<sup>い</sup>ろ<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>み<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>す<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>き<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>と<sup>い</sup>り<sup>い</sup>き<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>何<sup>い</sup>う<sup>い</sup>恨<sup>い</sup>ん

資夏

い<sup>い</sup>ろ<sup>い</sup>み<sup>い</sup>一<sup>い</sup>物<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>は<sup>い</sup>も<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>人<sup>い</sup>今<sup>い</sup>の<sup>い</sup>宿<sup>い</sup>の<sup>い</sup>も<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>

披書 恒念

乃晃

ふ<sup>い</sup>ろ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>う<sup>い</sup>し<sup>い</sup>う<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>事<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>を<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>家<sup>い</sup>の<sup>い</sup>玉<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>消<sup>い</sup>え<sup>い</sup>う<sup>い</sup>

乃晃

清製

と名付家かくもいれなる詔いしあまの位は極里れり

弘治

けし詔乃こそえりやう玉まあかひあもするそ此も

雅章

けし詔乃こそえりやう玉まあかひあもするそ此も

通茂

たもへ人いつまもお母うまのけい教をふきに積る恨故

玉ま

雅志

つらうもじおぬしけしうまのけい教をふきに積る恨故

次貝交

こむとつらうまのけい教をふきに積る恨故

雅志

たもへ人いつまもお母うまのけい教をふきに積る恨故

御制衣 照多院 日替新大御衣 四首

日替大御衣 一巻 中院中御衣 二巻



花より井方納言 一三

雅喬 一三

雅志朝臣 二五

後作

さね姫の

巻向此

四言此指もくもろなるといふといふ此  
山の指もくもろといふやうにいふくてもいふやうにいふ  
なう文字こそ向ふとも何とぞか何れやういふは  
二指を我もきよきよとせくはなれり

むくし草種はく優なれは子細き世にして世子細きこ  
立々あり 又文字もくもあす

きしなくと別事とわくはなしてとあつたはも四言此  
指も甲やうぬこあけおのりなうは後なると入  
きしもかかへーけやうあうすはくいしはうる  
なれをいふはいつきてくふれり

それれく ちりれは度ららこよみりては道達港の  
ちりあり

このあつち  
はやいねくつりるすにらりやうなれと下句せハ

—うやうあまゆさし

雲まろし  
まじあふもいそくするあはれあはれけりこま

さううあはれあはれけりこま  
清くしてまじあふもいそくするあはれあはれけりこま

清くしてまじあふもいそくするあはれあはれけりこま

はたふあまれ  
くつくあまれこま—はくむしすうの

あまれこまいそくするあはれあはれけりこま

あまれけりこま  
上句とがまへる見下句いそく

あまれこま  
まやれつあまれあまれこまいそくするあはれあはれけりこま

まやれつあまれあまれこまいそくするあはれあはれけりこま

あまれこま  
まやれつあまれあまれこまいそくするあはれあはれけりこま

まやれつあまれあまれこまいそくするあはれあはれけりこま

あまれこま  
まやれつあまれあまれこまいそくするあはれあはれけりこま

まやれつあまれあまれこまいそくするあはれあはれけりこま

まやれつあまれあまれこまいそくするあはれあはれけりこま

万治二年七月廿日

あまれ初歌

仙洞勅定



樹屋軒のこゝろにみんとと振ゆあさるやうに

五月雨

五月雨み池とこらに花庭とつこをれぬ日数とるる時り  
江比乃おぢれ々けの庭とつこつぎうれに

移河

乃日光

引れくせうあの子繩らうーちん家後世とあわねと

笠戸楯

ふー夏の秋り香とめて友も又おぢく新語と句ふ立  
香と匂いと自然あはる一はれとおほくはなつて

藤又立

ちりあさうに死とを衣吹し母り何しともはふ又立を  
あのみとみりこして葉持とぬさし

野堂

白河三位

秋の野にん尾花いととのあまの名あまうさ堂にあまは  
五羽とて

納涼

御

引こ起りこ思秋風のきお川原のうらぐつらあまはさ

六月被

資

ま戸つ子あは月れは被しつあれと手北思とあしこ

不逢志

何ぞてかく世次つらうは後の世のむくおれ人々にゆき  
是も耳をれうう敬白

白川之位

切意

あけおくりえん合ふあふとゆきうてい何れ人こそん

志

日光

中ミチのよりしてすむうりもハ程なうそあう人のまゝゆれあひそ

近

通茂

偏あねんもえしてア程なうのちアゆきうてい何れ中よりゆき

閑居

妙法院文

おれあてても何とていことには花ハなうぬきうてい何れ中よりゆき

志

清

あふことゆきうてい何れ中よりゆき

てい何とてあふん志志ハ志最初ハ志こそ志志志志ハ志志  
け志志ハ何とて志志志志ハ志志志志ハ志志志志ハ志志  
志志志志ハ志志志志ハ志志志志ハ志志志志ハ志志志志ハ

行

妙



其の居れりてその好しは言はば何なるもの恨跡は人

恨

雅章

よひあまを恨しうす此をうつこむのつとひをふさぐ

初意

弘

口をれ福の福のいをもてふをいひて神のうきひを

忘れし此福のいをもてふをいひて神のうきひを

古事同し物事即ちやうて忘るひいひを

結

通

引れりしもうしや能きまをて人々のあはれはくたは

結

初意

引れりしもうしや能きまをて人々のあはれはくたは

初意

うちとなれ人の心はあうくしなる此ことおむをうれこ

初意

伯三位

引れりしもうしや能きまをて人々のあはれはくたは

初意

初意

引れりしもうしや能きまをて人々のあはれはくたは

初意







雅直又三  
通茂又四

同二年八月九日

画栖秋事

是

刻あつて身いなるり此居れ居り又人あこれ秋は来  
上句下句下句下句下句下句下句下句下句下句下句下句下句  
何とそそきれも何とそそきれも何とそそきれも何とそそきれも  
人なこころい場とくさ

中院中御

分ちゆく志きさ蓬れおくまてはうさ袂風のいつて多らん

清

刻又世を秋い来おりおらひちいほらうれさうのそお居よ

妙

ごちそて、戸はー何そお津よもさうれんさ思さ秋やい

弘

何とそし人さちそくふとさぬの家わひそむと秋の

辛平

いこもやも秋もあつじ思もれん家あやな遊そ  
たぐ

いちもてー<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>ひく<sup>い</sup>入<sup>い</sup>や<sup>い</sup>り<sup>い</sup>て<sup>い</sup>も<sup>い</sup>る<sup>い</sup>も<sup>い</sup>秋<sup>い</sup>の<sup>い</sup>風<sup>い</sup>

鹿声何方

い<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>も<sup>い</sup>て<sup>い</sup>風<sup>い</sup>も<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>吹<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>と<sup>い</sup>に<sup>い</sup>吹<sup>い</sup>と<sup>い</sup>樟<sup>い</sup>の<sup>い</sup>声<sup>い</sup>

まの

そこ<sup>い</sup>ー<sup>い</sup>と<sup>い</sup>お<sup>い</sup>も<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>定<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>や<sup>い</sup>も<sup>い</sup>一<sup>い</sup>る<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>り<sup>い</sup>に<sup>い</sup>声<sup>い</sup>

弘

い<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>も<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>樟<sup>い</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>て<sup>い</sup>や<sup>い</sup>り<sup>い</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>  
て<sup>い</sup>い<sup>い</sup>も<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>き<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>す<sup>い</sup> 声

通

そ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>も<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>かく<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>樟<sup>い</sup>の<sup>い</sup>聲<sup>い</sup>

は<sup>い</sup>の上<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>の<sup>い</sup>吹<sup>い</sup>たり<sup>い</sup>て<sup>い</sup>き<sup>い</sup>を<sup>い</sup>り<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>樟<sup>い</sup>の<sup>い</sup>声<sup>い</sup>

い<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>く<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>や<sup>い</sup>も<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>の<sup>い</sup>吹<sup>い</sup>も<sup>い</sup>も<sup>い</sup>野<sup>い</sup>の<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>や<sup>い</sup>ー<sup>い</sup>の<sup>い</sup>声<sup>い</sup>

声

西法傳文

あさりあやもさたる吹ちうあせ風ゆさむい樟庵の

月不撰處

花を井あち細そ

月を<sup>のこや</sup>むるは<sup>し</sup>る<sup>も</sup>玉乃うてな<sup>の</sup>光りて  
あは<sup>る</sup>る<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>れ<sup>る</sup>も<sup>と</sup>くつ<sup>う</sup>あ<sup>る</sup>やう<sup>な</sup>れ<sup>と</sup>  
まつ<sup>る</sup>り<sup>し</sup>て<sup>あ</sup>え<sup>ぬ</sup>こ

弘

月法こちう記<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>の<sup>あ</sup>る<sup>も</sup>それ<sup>言</sup>福<sup>よ</sup>す<sup>う</sup>る<sup>記</sup>も<sup>い</sup>つ

八き<sup>い</sup>く<sup>る</sup>る<sup>さ</sup>て<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>す<sup>む</sup>月<sup>も</sup>光<sup>は</sup>る<sup>玉</sup>の<sup>ま</sup>も<sup>そ</sup>ん

中法中細そ

い<sup>ら</sup>る<sup>あ</sup>え<sup>ぬ</sup>も<sup>ろ</sup>こ<sup>し</sup>は<sup>海</sup>山<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>海</sup>月<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>り<sup>ハ</sup>

た<sup>ち</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>こ</sup>う<sup>が</sup>る<sup>の</sup>月<sup>光</sup>を<sup>ら</sup>も<sup>さ</sup>ら<sup>に</sup>く<sup>れ</sup>い<sup>ら</sup>る<sup>あ</sup>る

雅也

野<sup>の</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>こ</sup>う<sup>の</sup>は<sup>あ</sup>や<sup>と</sup>り<sup>も</sup>月<sup>光</sup>を<sup>ら</sup>も<sup>さ</sup>ら<sup>に</sup>く<sup>れ</sup>い<sup>ら</sup>る<sup>あ</sup>る

山つづれ垣はのちもえうらまじいつく此月の秋の光也

初ふき意

中院中納言

このこととまの枝もかか一年で終くいのちうらま

弘

うーやいふかの味乃も園てくうらまは人し

也

あゝあゝいん味あつきくうらまのちうらまのちうらま

花を井お大納言

新となく初神こそはきれとくあうりてたあもつ

是

神とこへ初らあつきく恨りしはうらまのちうらま

後初培意

妙

いやまに才とまほし名あうらまの初あし神も

目光

いふれうてけさあ人のこつうらまのちうらまのちうらま

直

あつさりー 形えとをまハ  
いりけりや起出 床の形無髪をくれくあふたひさへ  
うら

又いつの夕と人か整りさうハけさーとアさぬあひなりし歌

まち倦し 鳴りのられの家さるとも又暮乃床ま消えさぬ  
き福さたうくいれー床の上はけ家此何れあさるん  
つれ乃さあね寝うー神のこくひいささ福の床よりさの海を

月多結友

伯三位

○ 向うさうらん 浅草の 五返れさうさもい 秋なれんあまの  
月記

逐夜月明

日光

○ 形ー さむうさもさひ 照ふをく 此山の 瑞うくさう月記

山家月

世の外とさひ入すー 山家もなをすて ぬ月も恨やー

椿寒を衣

弘

里つうすくをあふと 小あさえ 照結は 初衣うの声

傳中々意

いふれんえんびりせぬいなるものさつちつて何ん

曉歸意

伯三位

二つらうまやまゆれきやんあまにあらはるるのあはるる

絶久意

通

○こもぬをともそりいふれあをそとたもあまそく

隣家鶴

月

○なれぬりあうーいこと記中恒とるそてぬき此曉の

古寺鐘

清

土声

○山たご松の本のうまちえよく裾登まわく入おの

寺村燈

るも人やかのり里くうきん日とをちかすにまわく燈

同二年八月廿三日

二十首和弁

仙洞勅点

初秋夕

月光

系ふま川西と秋と夕なれ乃定よ月のゆく三日月の乳

七夕亦

をうけしは年五拾ても何す此川西に棹乃さうし

野徑秋

通

口をゆらん物といふを家ごとくに死もたはほそ家の  
とつて秋

山初雁

山十の月も久しきを方よつてもさやあとも初雁  
此声

海邊麻

おれも又妻を憶く棹麻のつゆまらふすす此浦  
此

秋田五歌

通

いとわてえも人もなる山田西に何と福を此る秋風

ん語意

信守意の下

うさささるんさめをかりにいつ袖の信いときかく立つ

逢急

にももさやを返ありきつれなこの後と恨いとさうい

折言

曉飯考ノ下

人れうへとう死をいふくかたうさかたのいさの路り

別



いつより此の世中此の世にゆく悟りて一人の世の  
厭

うらみ我の心しこにも言はれいと六人のことわり  
欲

あつれつりたりと云々ぬうう中かまさらなら名の  
いそれえ

田家

き村煙下

うきひのあはもて控一山田此ころ唐のうひ  
名所山

さく花のまーと名まこつて山社のあーこのまよる  
あ

こころ川

月七日もな加れてもあつて古松川一河をうて世とわ  
つくらん

こころ里

むらてゆく名所とそにもあつて松林上の里乃家の路  
あは

松林

浦風のあつたなるあも初んうらに居の松よまらる  
らん

社乳柳

通



水竹柳

引りぬくふしや徳子多柳のあまをいそぐき水竹あまをいそぐ川

あまの字入くしりて月なること何れとせか入彦川

お宅秋

通彦

引りぬくふしや徳子多柳のあまをいそぐき水竹あまをいそぐ川

夏にけりこの月秋多徳のといさうあまをいそぐ

垣子にけりあまをいそぐと子細あれいそぐ

こと能くていそぐとねこ

春暁

御

えぬくふゆ月あまをいそぐのあまをいそぐ山あまをいそぐのあまをいそぐき水竹あまをいそぐ川

あまの

秋夕

喬

引りぬくふしや徳子多柳のあまをいそぐき水竹あまをいそぐ川

盛花

照

いそぐあまをいそぐと子細あれいそぐとねこ

明月

引りぬくふしや徳子多柳のあまをいそぐき水竹あまをいそぐ川

暮春

通彦

引りぬくふしや徳子多柳のあまをいそぐき水竹あまをいそぐ川

晚秋展

弘

霜ふき 影さし 花あけ ぬれさるるを かくれゆく 秋又は

あれまぐ 臥すまぐ ぬるれを けしけり

あぢき

弘

さあも又くさくさいおくいくさ 此田向此ら苗とさふひ

寒草が

通茂

つるおひに  
むらけ やう 影さし 花あけ ぬれさるるを かくれゆく 秋又は  
いづまて  
むらけ やう ぬれさるるを かくれゆく 秋又は  
福さういつ返てまいぢやうといく程をいさやうに程さし

雲月郭云

山の頂月をさうお雲の影さしりもれおさる月となくゆき

雲中人

日光

ふしをさしこわくさうさうさのちん人い恨の影さしり  
又をさし柳の影の影さしりさうさうさうさうさうさうさ

照射

月

いつとこれさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
あうられさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
俗さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

細体

川流石をくわくを流はるや夜をにわく細代かきん

曉政遣火

山とよのやみ此標をさかきかつかうとあすれらこや  
あ持ゆいたけれとも曉政遣火のやりのれきか  
を母とたうらにうさこ

深夜埋火

うさへう友とるれいさう夜にわくことと埋火のや

昔後夏夜

市後川やーを流をいやーさとも死もたては流のわ  
あ

都鄙歳暮

通

かひし都の外の良はなとたててあさうーれ名あ  
あ

あか風色

弘

かみかかくとつきふまごさるのりううるに山あいの

一塚一

通

かひとあし標のそとと流也ととれ思うさよの清  
あは

一山一

弘

月日さつともおもひのせうえしちりうりれき山と及

一葉一

天高

人忘れぬ心のかくはきつらき  
かかれはきり此朽せしむ

一葉一

むふふとふくまき  
伊れきさくうつろかみとも

きき村燗織

すむ人もむらり  
燗と母を死をさる

山行旅行

通

引急か新  
このあひと合れ  
きり山行旅行

つら

松風入琴

天高

あききり松風入琴の通  
かきり松風の松風

あき松風

天高

あき松風あき松風  
あき松風の松風

松風

あき松風

弘

あき松風あき松風  
あき松風の松風

清製  
日暮大  
松風院文

白之位  
通茂  
雅也



